



2019 (令和元) 年 12 月 2 日 (月)

藤 棚

第 375 号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

今、文教行政に望むこと

校長 小川義男

萩生田文部科学大臣の決断により、大学入試の英会話力テストを、民間教育機関に委託するという、陳腐極まりない改革案は撤回された。久々に、受験生と日本の未来を思う実力派大臣の裁量に接し、心から敬意を表したい。その毅然たる生き様は、教育のみでなく、日本全体の未来を明るくするものとして瞳目に値する。

民間教育機関は、それぞれ大きな役割を果たしているが、高校教育の無償化が、安倍内閣の手によって実現されようとする今日、生徒とりわけ受験生が、学習塾、予備校に、高額な経費を投入している事実、公私を問わず、我々学校教職員は、自らを厳しく反省しなければならぬ。

冗談だと思って聞き流してもらいたい。保護者の教育費負担の減少を考えて、国家が莫大な教育投資を行った末に、生徒ひとりひとりが、年間 100 万円に達する、塾、予備校に金を払うくらいなら、いっそ、公立も私立も、学校など廃止して、希望者全員、学習塾に通うことにしてはどうか。保護者の負担は、それでも、今よりそれほど多くにはならないのではないか。

勿論これは冗談である。学校には、学校でなければ果たす事のできない使命がある。

しかし、我々学校教師は、教え子のひとりでも予備校に通っていると知ったら、「自分の指導のどこかに、足りないところがあるのではないか」と、厳しく反省しなければならない。

私には、自分が組んでいるゼミ生の 1 人が、予備校に通っていると知って、一夜眠れなかった覚えがある。ゼミ中に居眠りするので、尋ねて分かったことである。

学校と予備校、「二足の草鞋」は、どっちつかずになる危険がある。在学中の通塾は止めたのだが、既に、百万を超える学費を先払いしている実状もあって、彼を引き留めることはできなかった。その年も、翌年も、彼は進学できなかった。「二浪」の後に彼が成功したことを期待している。「何しろ俺は四浪だったからなあ」

恥を言うと、私が進学できなかった本当の理由は、当時、「進学適性検査」と呼ばれた知能テストで、文科は 27 点だったが、理科が 0 点だったためである。全国で、ただ 1 人だそう。しかし翌年は、文理合わせて 60 点、北大なら、優に合格できるランクであった。だが、腎臓炎のため、進学を断念せねばならなかった。これが「四浪」の本当の理由である。

大学入試に関して、英検、その他の民間教育機関を活用するというのが、当初の方針であった

が、しかし、田舎の高校生はどうなる。小笠原や八丈島はどうだ。

テスト会社の秘密保全是大丈夫か、それに、なにしろ金がかかる。萩生田文科相が、勇断を以て、方針を緊急中断した理由である。

「論述テストを加えたい」という話がある。これは、ある有力な民間有力機関自体が、「遠慮」した。

なんでそう、猫の目のように、大学入試制度を変えなければならないのか。予定しているのは「もの凄く短い作文」だそうである。それでも大変だから、「民間教育機関」に「お任せ」したいと言う。

大学の入試だ。学者諸君自身が、苦勞して採点すれば良い話ではないか。「大変だから民間教育機関に」と言う。少しおかしいのではないか。

大学入試に、それほど凝る必要はない。作文など、「下級教育機関」（我々を指す専門用語）でも指導しているし、大学入学後にも、指導すれば良いではないか。

「本務を下請けに」出していたら、大学自体が、「^{かなえ}鼎の軽重を問われるぞ」と、言わなくてはならない。高等学校、中学校でも、どしどし指導する。協力し合って、頑張っていこうではないか。

私が、北海道教育大学札幌分校に入学したのは 1954 年である。国立大学の入学金は 500 円、授業料も、月額 500 円であった。大卒の初任給が一万円だったから、ひと月の給料で二年間近くの学費が、賄えた事になる。

一々例を挙げることは控えるが、今の国立大学の学費は、余りにも高いのではないか。私立大学は、さらに高額である。

それなのに、英語に関しては、民間機関のデータが活用されるとすれば、多くの生徒は、これも受けることになる。「教育機関栄えて家計亡ぶ」という事態が生まれはしないだろうか。

文科省に尋ねたいことはほかにもある。今、夏休みさえ縮める「密度濃い学習」が行われている。かの「ゆとり教育」は、一体どうなったのか。変更するなら変更するで良い。しかし、文科省は、今でも、あの悪名高い「ゆとり教育の正当性」を理念として維持しているのか。文科省のエリート諸君と共に、じっくりと考えたいものである。

野党の諸君は、しきりに憲法改正反対を主張する。それはそれで立派なことである。しかし私には、諸君の動きが、旧社会党左派に先祖返りしているように思えてならない。

憲法改正は国家の根本問題だから、田舎校長の出る幕でない事は承知している。

しかし、これだけは考えて欲しい。幼稚園児の身体的発達は、昔の小学校二年生に近い。六年生女生徒の、すらりと伸びた身長に、ランドセルは不自然である。

中学校一貫部の、先取り指導の末に、高校三年生が学ぶべき事項が、必ずしも明確ではない。

「六三三制」そのものが、根本的改革を迫られているのではないか。

生徒諸君は、揺れ動く入制度改革などに惑わされてはならぬ。大切なのは、国語と英語、それに数学だ。自らの進路に合わせ、確固たる学習計画を立て、頑張ってもらいたい。

昔は、私の時代の「エリート中学校」の卒業生であっても、大学に進学できた者は、四割であった。

諸君には、学び続ける可能性が保証されている。遊んでいる暇などない。英語と読書、それに数学、または選択科目の実力蓄積に、力を尽くすのだ。諸君の若さと可能性が、私には眩しい。」これは亜細亜大学の校訓だが、明日の日本には、大切なのではないだろうか。